

## 1. はじめに

薩摩遺跡は、高取町薩摩に位置します。この遺跡は、高取バイパスの建設に伴って2004年度より発掘調査が継続されており、弥生時代～奈良時代におよぶ墳墓、集落、鍛冶遺構、水利施設などの存在が確認されてきました。今回の調査は、薩摩遺跡における第8次調査にあたります。

## 2. 調査の概要

今回の調査では、尾根と尾根とに挟まれた谷地形の中を発掘したところ、以下の所見を得たことから、古代に谷の一部を堰き止めて、溜池が作られたことが考えられるようになりました。

谷の中の土層は、上から順に中世の層、奈良・平安時代の層、古墳時代の層の三つに分かれます。このうち、奈良・平安時代の層からは、土器・瓦などのほか、土馬や銭貨（隆平永寶、承和昌寶）、木屑、木簡等が出土しました。

また、調査区の北端で、木樋が検出されました。これは大半が調査区外にのびているものと思われ、現状では一部分のみが現れたに過ぎません。そのため、具体的な構造については明らかになっていませんが、後述するように溜池からの取水口にあたるものと推定されます。

## 3. 木樋の構造

木樋は、長さ115cm分を検出しました。幅50cm、厚さ25cmの角材の内部を削り抜いて管を作り、蓋をかぶせて木樋とするものです。蓋は、現在では失われており、実際には出土していませんが、木樋の端部付近に、蓋を押さえて固定するための部材が残っているため、本来は蓋があったものと考えられます。

通常、取水部の開閉は水面上で作業を行いますので、この木樋も蓋の上面に取水のための孔があったものと思われます。おそらくは、蓋の孔に差し込まれた開閉装置（男柱）を引き抜くことで、水を流したことでしょう。木樋の脇で出土した直径35cmの柱は、この開閉作業を行うための足場であろうと考えられます。現在は片側しか見つかっていませんが、実際はこれと対になるように両側にあるものと予想できます。

木樋の端部（小口）は、栓でふさぐ形となっています。これは、木樋内に溜まった土砂を掃除する際に使用する蓋（砂蓋）であろうと考えられます。

この木樋の上には堤が築かれており、それによって水を堰き止めたものと推定できます。したがって、木樋の存在こそが、溜池の存在を推定する確実な証拠となります。

## 4. 木簡の出土状態

木樋の南側に少し離れた場所で、波多里長檜前村主が池を作ったと記された木簡が出土しました。木簡が出土した層位には奈良・平安時代の土器を含みます。

## 5. まとめ

以上の通り、今回の調査では、檜前村主により作られた古代の溜池が見つかったことが大きな成果です。

この溜池の規模がどの程度のものか、そこにはどれ位の貯水量があったのか、そして溜池により潤すことのできる田畑の面積はいかほどか、ということが明らかとなれば、我が国の古代土地開発の一端を具体的に知ることができると期待されます。

木樋には現在にもつながる技術が用いられており、水利開発史を考える上でも重要な資料となるものと思われます。木樋の構築時期や、堤の高さなどは次年度の調査で明らかにしていきたいと考えています。また、今回の発掘で見つかった溜池の奥には、現在も農業用水を供給する中谷池があり、両者の関連性も考慮されます。

（北山峰生）

高取町

さつま

# 薩摩遺跡第8次調査 現地説明会資料

奈良県立橿原考古学研究所



高取町 薩摩遺跡第8次調査 現地説明会資料

2008年12月14日

奈良県立橿原考古学研究所 〒634-0065 奈良県橿原市畝傍町1 Tel. 0744-24-1101（代表）

《 橿原考古学研究所 HP でも現地説明会の案内・説明内容をご覧ください。 http://www.kashikoken.jp 》

